



見守られて暮らす安心

「皆さんに助けられて幸せ」

菅原多喜子さん(千厩町)

娘が誕生日に贈ってくれたフラワーアレンジメント、孫の写真、旅先で買ったちょうちん、庭に咲いた今年最後のバラ―菅原多喜子さん(80)は千厩町で日常過ごす茶の間は、思い出の品や好きなもので飾られています。

怒っても笑っても同じ
だったら朗らかに
過ごしたい

夫の庄治さんが平成5年、65歳で先立って以来の一人暮らし。4人の子供のうち、3人は東京暮らし。娘の一人は千厩町内に嫁ぎ、ちよくちよく寄つては多喜子さんに心を配ります。

「怒っても笑っても同じ。どうせなら朗らかに過ごしたい」と多喜子さん。野菜作りや花作り、手芸が大好きで、テレビを見ながらも縫い物をしたり編み物をしたりと、手を休めません。月に一度の自治会のふれあいサロンに参加して、みんなで懐かしい歌を歌ったり手芸をしたりする時間を楽しんでいます。

父の勤務先の釜石市で生まれ、南小梨で育った多喜子さん。23歳で庄治さんと結婚し、庄治さんを助けて田んぼやタバコなど農業に従事する一方、他家の子供を預か

つて子守をしたり、近所の温泉施設の厨房で働いたりもしました。

自慢の野菜や漬け物が
離れた家族をつなぎ
絆をより深く

「多喜子さんは野菜作りが上手でお料理もうまい」と近所の人が認める腕前。千厩1-1区自治会長の照井秀子さんが訪れたこの日は、ハクサイ、たくあんから、ピーマンやトマトのみそ漬けと多喜子さんオリジナルのもので、5種類の漬け物が卓上に並びました。おいしいといわれれば作り方を教え、その漬け物がお土産になることも多いといいます。

自慢の漬け物は、東京の子や孫たちにも送ります。「楽しみにしている」と娘にいわれるとうれしくてね。何でも褒められるといいねとにっこり。

畑の半分は人に貸し、以前の自分の面積でも自家用では食べきれないほどの野菜を栽培。「自分が食べるというよりは、畑を荒らしたくないから作っているだけ」というものの、丹精込めた大根や白菜は、今年も立派に育ちました。これら野菜も東京の子や孫たちに送られ、「おいしかった」と言葉のキャッチボール。多喜子さんと離れた



家族の絆をより深くしています。

みんなに支えられ
誰かを支える
お互い様

「皆さんに助けられて幸せ」と素直に口にする多喜子さん。「人間は人という字のとおり、支え合わないと生きていけない」と語ります。近所の人や近くの娘に見守られ、一方で野菜や花や漬け物を家族や近所に配ったりと、支えられているだけでなく、支えてもいる多喜子さんです。

この日訪れた照井さんも、川崎町の実家に一人で暮らす母を2日に1回は訪ねるといいます。

「自治会でま」ころ交流を始め、以来、地域の中で人に頼みごとをしやすい空気が生まれてきた気がする」と照井さん。「お互い様」という言葉が浮かびます。

「体が動くうちはここで暮らしたい。息子の退職まであと数年。それまでは元気で過ごしたい」。隣で照井さんがうなずいていました。